

関西支部勉強会レポート

第 30 回関西支部勉強会

「国民との科学・技術対話」って… 研究者は何をすれば良いか？

日時 2013 年 4 月 30 日（火） 18:00-20:00

場所 京都大学 吉田泉殿

ゲスト 白井 哲哉 氏（京都大学 学術研究支援室 リサーチアドミニストレーター（URA））

人数 23 人

記念すべき 30 回目の関西支部勉強会。京都大学内で URA としてお仕事を始めた方が多く参加されましたが、他にも、関西の大学生、大学院生、教職員や、自営業の方など、いろいろでした。今回初めて参加された方が多かったような気がします。

まだまだ、出会えていない方はたくさんいそうです。そして、案外近くにいそうです。これからも勉強会を続けて行きたいです。

さて、今回のお話は・・・

お話の目次：

1. 自己紹介&京都大学 URA のお仕事紹介
2. 「国民との科学・技術対話」って？
3. 京都大学「国民との科学・技術対話」WG
4. 京都大学アカデミックデイ
5. Q&A

関西支部勉強会レポート

お話の詳細：

1. 自己紹介 & 京都大学 URA のお仕事紹介

- ・白井さんの自己紹介

生命科学

↓

生命科学と社会

↓

生命科学と ELSI

↓

URA

- ・URA とは？

文部科学省主導でできた

- ・京都大学学術研究支援室 (KURA)

研究担当理事直下にある組織

業務は多様

プレアワード (研究戦略・企画) ~ ポストアワード (運営・管理業務) まで
ざっくり分けると、1) 企画支援、2) 運営支援、3) 広報支援、の3つと

URA の普及・定着

今のところ、1) にかけるエフォートが一番多い。

京都大学には、本部 URA+部局 URA、合わせて 30 人ぐらい

2. 「国民との科学・技術対話」って？

文書「『国民との科学・技術対話』の推進について」

大学や研究機関には「積極的に『国民との科学・技術対話』を行うよう促すとともに、個人の評価につながるよう配慮する」と書かれている。

何をどうすれば良いかわからず困っている研究者がいる

3. 京都大学「国民との科学・技術対話」WG

- ・WG

H23 年度に設置

関西支部勉強会レポート

活動内容：

- 1) 学内研究者のニーズ調査
- 2) 研究者向けの説明会
- 3) 対話の場の提供
→これが「京都大学アカデミックデイ」

・京都大学での「国民との科学・技術対話」のスタンス

- 1) 自然科学だけでなく、人文科学を含む学術研究全て
- 2) 「科学の知識や情報」だけでなく、「科学のプロセス」や「科学を営む人」を伝えることも重視
- 3) 科学者・研究者も市民（非専門家）だし、分野が違えば科学者も非専門家
→研究者と市民が対話、研究者と研究者とが対話

4. 京都大学アカデミックデイ

・概要

URA 室、研究国際部研究推進課、WG で共同開催
多様な対話を提供

- 1) ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）
- 2) ポスター前で立ち話（ポスター対話）
- 3) お茶を片手に座談会（トークライブ）
- 4) 絃の部屋（対談式講演会）

他にも・・・

科学・技術フェスタにも出展

WG での議論をなるべく反映

“アカデミックデイでは学術基礎研究に関する対話だけではなく「社会における学術研究の位置づけ」など、他のモノについても対話をしかけてはどうか”
“「研究を理解して欲しい」という態度では何も分かってもらえないと思う。「対話」をする事が大切”

“京大流を出していきたい”

“国民との科学技術対話は大学の「外」でもやる必要があるのではないか？”

関西支部勉強会レポート

・「支援」としてのアカデミックデイ
複数の京大研究者を同時に支援できる

- 1) 対話の場の提供
企画・運営
- 2) 準備のサポート
事前説明会、トレーニングプログラム
- 3) 活動報告書の提供
→ノウハウの蓄積と共有という意味も
- 4) アンケート調査

・今後の課題

目的に立ち返ってデザインを考えたい。

そもそも、なぜ「国民との科学・技術対話」が必要なのか。とか。

説明責任？

科学リテラシーup？

国民からのフィードバックを受けるべし、という社会的な流れもある

サポートのあり方

研究者の負担を減らすためには？

民間企業の活用方法は？ など

・今年の「京都大学アカデミックデイ」は京都大学百周年記念時計台で12月21
or 22日 開催予定

5. Q&A

Q. 学内研究者って何人？

A. 4000人ぐらい

Q. 人文科学系でどうアウトリーチをしたらいいのか困っている人もいますので
は？

関西支部勉強会レポート

Q. 学内研究者にどうアカデミックデイのお知らせを流しているの？

A. 研究推進課→各部署の担当課→研究者というルート

Q. 「国民との科学・技術対話」や「アカデミックデイ」って誰のためのモノ？
アカデミックデイは、大学側が主導で場を設計したときに、上質な場、という気はする。

でも、“国民”は本当に対話をのぞんでいるのだろうか？

大学側の“片思い”だったりもするよね。

もし、完全にボトムアップで、“国民”主導で設計される場があったとしたら、ど
ういう場になるんだろう。

理想的には、その両者が合致するのがいいと思うのだけれど、大学が主導する
場とそれぐらいズレるんだろうね？

Q. アカデミックデイのメディア露出はどれぐらい？

Q. 来場者の変容を求めている？ であれば、それをはかるようなアンケートな
ど設計してる？

Q. URA ってどう評価されるの？

Q. 「国民との科学・技術対話」は、ポストアワード支援ってことなの？ でも、
プレアワード支援とも捉えられるのでは？

科学コミュニケーション研究会 関西支部有志

第30回 記録担当：水町 衣里（京都大学）

第30回 運営担当：水町 衣里（京都大学）、加納 圭（滋賀大学/京都大学）